■ 海外情報 ■

# ベルリンに残るナチス好みの建築とナチスドイツへの反省

お茶の水女子大学名誉教授　　田中　辰明

## はじめに

本誌2014年８月号から10月号にかけてドイツのバウハウスに関する報文の連載を行った。近代建築の生みの親はヴァルター・グロピウスとル・コルビジェであろう。グロピウスの初期の作品は本誌2014年２月号に「世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場」として紹介を行ったように1911年の設計である。したがってグロピウスの方がコルビジェより先輩にあたる。グロピウスの初期の作品は工場関係のもので、師匠ペーター・ベーレンスの手法を継承したものであった。グロピウスが手腕を発揮する絶好の機会は第一次世界大戦の後である。ヴァイマール共和国の出現で、ドイツは国内の大改造を行っていた。例えば労働者の住宅をより健康的なものにしようと言う社会住宅(Sozialwohnung)の出現などである。ヴァイマール共和国は遠大な思想と社会の要求に応える建築家を必要としていたのである。これに応えた建築家にブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウス、フランクフルト・アム・マインに住宅団地を計画したエルンスト・マイらがいた。そして大規模な住宅団地が立案された。それはジードルング(Siedlung)と呼ばれ、通常学校や商店も含む大規模なものであった。日射や風通しに配慮し隣棟間隔も十分に取られた。それまでの旧式のものは中庭式のもので、風通し、採光も不十分であった。またバルコニーが付けられるようになった。グロピウス自体の名声はデッサウのバウハウス校舎設計である。芸術の総合学校と言える。グロピウスはヴァイマールでヴァン・ド・ヴェルドの後任者としてバウハウスの運営を任された。1925年デッサウに移転し、グロピウスは市の評議会から学校そのもの、住宅などの設計依頼を受けている。バウハウスは1932年ナチスが台頭するまでは栄えたが、その登場と共に弾圧を受け閉鎖になった。グロピウスは1928年にバウハウスを辞職し、ドイツ国内のジードルング設計に尽力したが結局米国に亡命を余儀なくされた。バウハウスの思想は芸術を統一することの重要性と近代デザインの最大要素として工業生産に重きを置く事であった。グロピウスの目的はバウハウスのさまざまな部門で、大量生産の基準となる高級なデザインを作り出す事であった。工房を設け学生は実際にデザインされたものを生産した。しかしナチス政権が樹立されるとバウハウスはアーリア的でない、ユダヤ的であるとして弾圧されるようになる。ブルーノ・タウトも同様に弾圧を受けるようになった。

## 1．ナチス好みの建築

タウトが推進したモダニズムの建築とは前時代の装飾性、様式主義を否定し、合理的、機能的な建築を追及するものであった。それは生活苦に悩むドイツの芸術界における美の乱舞であった。建築のみならず絵画、文学、彫刻、音楽、舞踊、映画、演劇を狂乱状態に押し込み、旧来の様式を叩き潰した。機能主義的な思想が世界的に普及しつつあった。

1933年ナチスが政権をとるとバウハウスの弾圧を始め、ブルーノ・タウトが主導した表現主義建築、モダニズム建築も弾圧されるようになった。表現主義はもとより、国際主義、合理主義もユダヤ的なものとみなされ、排斥されていった。その結果モダニズムを主張してきた建築家は亡命するなどして海外へ去らなければならなかった。ではナチス好みの第三帝国国粋主義建築とはどのようなものであったのか？ナチスの建築家として多くの演出を行ったのはアルベルト・シュペーア(Albert Speer , 1905～1981)である。父、祖父も建築家で本人も高等教育を受け緻密な人であった。ナチスの宣伝大臣であったゲッペルス、さらにヒトラーの信頼を受け1934年にはナチス党の主任建築家となっている。またニュールンベルクの党大会会場を設計している。古代アナトリア[註1)]のヘレニズム期[註2)]の建築、ペルガモンの大祭壇[註3)]、ドーリア式[註4)]建築を参考にして24万人収容の大建築を設計している。ベルリン建設総監に任じられ、大首都計画とし、「ゲルマニア計画」を立案した(図１～３)。これは画家、建築家を目指していたヒトラーが構想としてスケッチしたも

図1　オリンピック競技場の上を飛ぶツエッペリン号(Hans Liska 作 1936 年)[7]

図2　ゲルマニア案 1939[7]

図3　ゲルマニア案 1939[7]

のを下敷きにした。この計画の延長上にできるオリンピックスタジアム(1934～1936, Werner March設計、**写真1**)はナチス建築の例として現存している。この作品に対しブルーノ・タウトは日本からトルコへ出国する直前の1936年9月20日の日記に所感を述べている。「人間の知覚は、私たちが拡声器、望遠鏡、照明塔などのメカニズムを自由に活用するようになってから、著しくこの能力が高められた。この事実はまた、建築における新機軸でもある。これによって私たちの知覚は、人間の生具の間隔を遥かに超出する広大な範囲に達した。例えばベルリンのオリンピック競技場では、10万人もの群衆が同時に見、かつ聞くことができたのである。確かにマルヒは非常に勤勉な建築家だし、またその作品には雅致がある。しかし今度のオリンピック建築はこれから先き長い間、建築界に俗物的な観念を植え付けることになるかも知れない。要するに『頭脳』と芸術とが欠けているのだ。巨大な軸を持って競技場全体を貫き(これは軸に対する偏執にほかならない)、この軸を挟んで相対する塔を数か所立て、こうして会場を任意に区切っているが、その印象は射撃場そっくりである。」(篠田英雄訳)

三国同盟を結んでいた日本国の大使館(1938～1942、Ludwig Moshamer設計、**写真2**)、イタリア大使館(1938～1941、Friedrich Hetzelt設計、**写真3**)、テンペルホーフ飛行場(Zentral Flughafen Tempelhof, 1936～1941、Ernst Sagebiel設計、**写真4**)もナチス好み建築である。ベルリンのティアガルテンに建つ戦勝記念塔(ジーゲスゾイレ：Siegessäule：**写真5**)もナチス好みの建造物である。当初はハインリッヒ・シュタックの設計により、

写真1　オリンピックスタジアム

プロシャがデンマークに勝利した事を記念して帝国議会の前に建造された。その後普墺戦争、普仏戦争の勝利を記念し改造された。アルバート・シュペアの手により1941年大改造が行われ、今では観光名所となっている。場所もティアガルテンに移設されている。ヒトラーは数千年の歳月が流れても遺跡として残る建築がすぐれた作品であると主張し、鉄筋コンクリート、鉄骨造よりも石造建築を好んだ。アルベルト・シュペーアはヒトラーの信頼が厚く、軍需相に抜擢された。その結果終戦後ニュールンベルク裁判にかけられ、シュパンダウの監獄に20年間収監された。

日本大使館は旧西ベルリンに建っていた。終戦後西ドイツは首都をボンに移したため、日本大使館もボンに移った。その結果ベルリンの旧大使館は長期にわたり廃墟のような状態で残っていた。ベルリンに侵攻したソ連軍の砲撃を激しく浴びた痕跡があった。筆者は1972年に許可を得て廃墟となっていた旧日本大使館の写真撮影を行った。レンガ作りで、終戦近くは邦人を住まわせたのか数多くの収容所のようなベッドが埃を被って残って

写真２　現在の日本大使館

写真３　イタリア大使館

写真４　テンペルホーフ飛行場

いた（図４～11）。

## ２．ナチスドイツへの反省

バウハウスが光かがやき、ブルーノ・タウトがベルリンで活躍した1920年代は後になって黄金の1920年代とも言われるように表面上は繁栄し、文化面でも素晴らしい時代であった。しかし正当な選挙を通じてナチス党が政権を握るや、当初はドイツ全国に高速道路網（アオトーバーン）を建設、国民車（フォルクスワーゲン）を製造するなど、国民の支持を得る政策を実行した。アオトーバーンの建設は失業者に職を与え、景気の高揚に寄与した。第一次世界大戦で敗戦国となり、自信を失っていたドイツ人に国粋主義を浸透させた。若者の賛同者を得るようにヒトラーユーゲンド（ヒットラー青年団）を創設するなど、ドイツ国民の支持を得る政策を行った。政権取得時にはユダヤ系ドイツ人は金持ちが多かったので、そこから金銭提供を受けられるように直ちにはユダヤ人迫害を行ってはいない。当初は町のならず者（やくざ）、同性愛者、精神障害者、ジプシー（チゴイナー）等の少数民族を

写真５　戦勝記念塔：ジーゲスゾイレ

収容しこれも国民に歓迎された。ローベルト・ライ（1890～45）はナチス党宣伝を担当したゲッペルスと並ぶ智慧者であった。当時強大な力を持っていたドイツの労働組合を一元化し第３帝国の「ドイツ労働戦線」に編入させた人物である。ライは船舶の建造に力を入れた。ナチスが政権を取得してから豪華客船を次々に建造した。１等船室、２等船室を廃止し、国家の補助の下、格安の料金で船旅が楽しめるように仕向けた。これは「クラフト・デゥルヒ・フロイデ（KdF／喜びを通して力を）」と言い、当時わが国では「歓喜力行」と訳された。これらの船舶はKdF船舶と呼ばれた。ナチスが唱える「国民社会主義」を実現したものとして国民の支持を得た。それまで、社会民

図 4　廃墟の状態であった旧日本大使館 1972 年（以下図 11 まで同じ）

図 5

図 6

図 7

図 8

図 10

図 11

図 9

写真６　現在のドイツ国会議事堂

写真７　ベルリン市中央部に立つかって強制収容所があった場所を示す看板：「われわれは決して忘れてはいけない」と記されている

主党、共産党へ投票していた人たちもナチス党支持にまわってしまった。ドイツではナチス党が1933年政権を取得するや、ドイツ帝国議会から出火する事件が起きた（**写真６**）。これはナチスによる故意の放火と言われているが、ナチス政権はこれを共産党による放火と宣言し、共産党員を国会議員も含め逮捕するようになる。さらに弾圧は社会党にも及ぶ。そして共産党、社会党が自分の党利党略に懸命で、団結をしなかったことから、簡単にナチスの党略通り独裁政権が成立する事になったのである。その後反ユダヤを政策に挙げ、支持を広げていった。第一次世界大戦敗戦の払いきれない賠償金を規定したベルサイユ条約を承認したのはゲルマン人でなく、ユダヤ人であって、ユダヤ人の撲滅が必要であるという理論である。これが第二次世界大戦へつながっていった。まさにタウトが恐れていたことが現実になってしまったのである。タウトが故国を脱出したのはユダヤ人迫害が始まる前の社会主義者弾圧が原因である。ドイツは第２次世界大戦でも敗戦し壊滅状態となったが、奇跡の復興を遂げ平和を取り戻している。しかしナチス政権時代の愚行を忘れてはいけないとして、ベルリン市の繁華街の一つヴィッテンベルグ広場には「我々は恐怖の次の場所を決して忘れてはいけない」として12の強制収容所のあった地名を記した看板が立てられている（**写真７**）。ベルリン市のかってユダヤ人が多く住んでいた地域には柱を立てナチス政権時代のユダヤ人虐待の政令を看板にして掲げてある（**写真８**：ユダヤ人はドイツ赤十字の社員になれない。1938年１月１日）。この地域の看板に記されている条例を年代順に並べると次のようになる。ナチスが政権を取ってから時代が経つにつれてユダヤ弾圧が厳しいものになってくること、さらに矛先がポーランド人にも

写真８　ベルリン市内に立つナチスドイツ時代の法令

向けられていたことがわかる。ここではナチスの台頭とその蛮行を年代順にも併記（斜体で表記）した。

*1933年２月１日：ヒトラーの圧力に屈したヒンデンブルグ大統領が国会を解散*

*1933年２月４日：ワイマール憲法第48条を行使し、ヒトラーによる最初の非常事態宣言*

*1933年２月20日：財界首脳がヒトラーと会談。財界から選挙資金の提供を約束。*

*1933年２月27日：国会議事堂炎上「ドイツ民族への反逆および破壊活動に対する法令」発布*

*1933年３月３日：ドイツ共産党党首エルンスト・テールマン逮捕*

*1933年３月５日：国会選挙、ナチス党は43.9％で、第一党となる。*

1933年３月18日：ユダヤ人辯護士、公証人は将来ベルリン市の法律業務に従事することを禁止する。

1933年３月23日：「民族と帝国の困難を排除する法律」が成立し、ヒトラーの独裁政治が始まる。

1933年３月31日：1933年以降ユダヤ人医師により処置された医療費はベルリン市健康保険局では取り扱いを

写真９　ユダヤ人を強制収用所へ鉄道輸送したベルリンのグリーネヴァルト駅。周辺は高級住宅地で、豪邸が立ち並ぶ

写真 10　17 番線からユダヤ人を強制収用所へ送ったことをドイツ鉄道の名において記している

写真 11　線路にはベルリンからアウスシュビッツなどに送られたユダヤ人の数、日付が記されている

行わない。

1933年３月31日：ユダヤ人裁判官は休職とする。

1933年５月10日：ベルリン、ミュンヘン、ドレースデンなどで「焚書」が行われた。トーマス・マン、エーリヒ・ケストナーなどドイツを代表する作家が含まれていた。

1933年８月16日：ユダヤ人はコーラス協会から除名

1933年10月１日：ドイツ自動車クラブはユダヤ人の入会を認めない。

1935年９月15日：純粋なドイツの血統を持つ国民とユダヤ人の結婚並びに結外交渉は投獄対象となる。それにも関わらず行われた結婚は無効である。

1936年１月29日：外国からの訪問者に悪印象を持たせないため、極端な表現の看板は避けるべきである。「ユダヤ人お断り」という表現で十分である。

1937年６月８日：ユダヤ人女性と結婚した郵便局員は退職の事

1938年１月１日：ユダヤ人は赤十字社員にはなれない。

1938年７月31日：健全な国民感情が無視された場合、遺言によるユダヤ人への財産贈与は無効となる。

1938年10月５日：ユダヤ人は旅券に“Ｊ”の押印を受けること。ユダヤ人旅券に“Ｊ”の押印がない場合は国境で旅券が没収される。

1938年11月12日：ユダヤ人は自営の手工業を経営禁止。

1938年12月：ユダヤ人出版社と書店は年末までに閉鎖の事。

1938年12月３日：ユダヤ人の自動車免許と車検は無効とし、発行は行わない。

1939年１月16日：ユダヤ人の国外退去に当たり、装飾品、宝石貴金属類の持ち出しを禁止する。

1939年１月17日：ユダヤ人歯科医、歯科技工士、薬剤師、看護師の就業を禁止する。

1939年３月24日：ユダヤの文化協会はシナゴーグを取り壊すこと。再建は認めない。

1939年９月１日：ユダヤ人は午後８時（夏期９時）以降自宅からの外出を禁止する。

1940年７月４日：ベルリンではユダヤ人は食料品を午後４時から５時の間に購入の事。

*1940年９月：日独伊三国同盟*

1941年３月１日：ユダヤ人に強制労働義務化

1941年10月18日：この日初めて多くのベルリン在住ユダヤ人が強制収容所へ送られた。

1941年10月23日：ユダヤ人の国外への移住禁止

1942年２月14日：パン屋，菓子屋は「ユダヤ人とポーランド人にはケーキを販売しない」と記した看板を設置の事

1942年７月11日：この日初めてアウスシュヴィッツ絶

写真 12　ドイツ鉄道ベルリン中央駅

滅収容所へ多くの人が送られた。

1942年９月18日：ユダヤ人への食肉、食肉加工品並びに関係食料品の供給停止

1943年３月26日：ユダヤ人流刑の為、職場における組織的逮捕

*1945年３月：米国軍ライン河を越える。*

*1945年４月：ソ連軍ベルリン侵攻*

*1945年４月30日：ヒトラー自殺*

*1945年５月８日：ドイツ無条件降伏*

ベルリンで裕福なユダヤ人が多く住んでいたグリーネヴァルト地区、そこにはドイツ鉄道のグリーネヴァルト駅(**写真９**)がある。この駅の17番線ホームからユダヤ人は貨物列車に乗せられ各地の強制収容所に送られた。この事を永久に忘れてはいけないとし17番線ホームは永久保存となり(**写真10**)。ホームには「何年何月何日に何人のユダヤ人がアウシュヴィッツへ送られた」と刻印が施されている(**写真11**：1943年８月24日に50名のユダヤ人がベルリンからアウシュヴィッツへ送られた)。ヴィッテンベルグ広場の看板の下から５つ目に記されている「ザクセンハウゼン」はベルリンから郊外電車に乗り30分もすれば着いてしまうベルリン市から最も近い場所にあった強制収容所である。筆者も見学をしたことがあるが、ここも永久保存になり一般公開されている。ここでは10万人の人が虐殺されている。

ブルーノ・タウトはアインシュタインを名誉会長としたソヴィエット友好協会の会員で、そこで講演をしたこともあった。この協会はナチスから好ましくないものとして烙印を押されていた。タウトの親しい友人であった平和主義者であり、社会主義者であったエーリッヒ・バローンもレールター通りの監獄で虐殺されている。レールター通りとは現在ドイツ鉄道のベルリン中央駅のあるところである(**写真12**：ベルリン中央駅)。強制収容所が出来たのはバローンが殺害された後の1935年である。既に来日していたタウトは1933年６月10日の日記に「エーリッヒが死んだ！恐ろしい夜だ」と書いている。エーリッヒ・バローンが住んでいた集合住宅は今もベルリンに残っている(**写真13、14**)。タウトもナチスに逮捕されれば、タウトの性格から他人を陥れるような事は出来なかったであろう。恐らく、エーリッヒ・バローン同様に拷問を受けたであろう。恐ろしい事である。ザクセンハウゼンの収容所はユダヤ人だけでなく、政治犯やナチスに不都合な思想家も収容されたのである。市民から敬愛されていた神父、牧師もいた。彼らの多くは独房に入れられた(**写真15**)。第二次世界大戦中に、ヒトラー率

写真 14　エーリッヒ・バローンが住んでいた集合住宅
所 在 地：Kavalierstr. 22, Pankow, Berlin

写真 13　社会主義者エリーヒ・バローンが 1933 年２月 27 日ナチス警察により逮捕され、レールター通りの監獄で殺害されたという看板

写真 15　ザクセンハウゼン収容所の独房：ナチスに反対する有名な牧師が収容されていた
所在地：Straße der Nationen 22, D-16515 Oranienburg

写真 16　ザクセンハウゼン収容所正門：「労働は自由を与える」と記されている

写真 17　ザクセンハウゼン収容所の収容者ベット

写真 18　ザクセンハウゼン収容所の遺体処理台・１本の薔薇が立てらえていた

写真 19　ザクセンハウゼン収容所の死体運搬車

写真 20　ヴァンゼー会議記念館、所在地：Am großenWannsee 56-58, 14093 Berlin

いるナチ政権が国家をあげて推進した人種差別的な抑圧政策により、最大級の惨劇が生まれたとされる強制収容所である．アウシュヴィッツと同様入り口には「労働は自由を与える」というスローガンが残っている（**写真16**）。アウシュヴィッツ強制収容所はザクセンハウゼン強制収容所をモデルにし作られた最も残酷な収容所と言われている。何時も見学者は絶えず、特に先生に引率されて見学する高校生の姿も見られる。見学者は単にドイツだけでなく、外国からの訪問も多い。しかし内容は誠に恐ろしく、狭い睡眠用ベット（**写真17**）、死体収容所、死体解体室（**写真18**）、死体搬送車（**写真19**）などまともに目を向けられたものではない。1942年１月にベルリン市西郊のヴァンゼーという湖の近くの館でナチス高官によるヴァンゼー会議が開催された。如何にしてユダヤ人を絶滅させるかという会議であった。ここも現在では人道に反することを行った記念館として保存され、一般に公開され

写真 21　国会議事堂前にある処刑された国会議員の碑

写真 23　虐殺された欧州のユダヤ人記念碑、
所在地：Cora Berlinerstraße 1, 10117 Berlin

ている(**写真20**)。

ドイツはこのような恥部を積極的に公開することで、過去に起きた歴史を忘れないようにする努力をしている。ナチスにとって不都合な国会議員で処刑された者も多い。現在の国会議事堂の前には処刑された国会議員の出身地、所属政党などを記した石碑が建っている(**写真21**)。ベルリンには1999年９月にユダヤ博物館(**写真22**)が建設された。これはユダヤ系ポーランド人建築家で活動拠点を米国、英国にもつダニエル・リベスキント(Daniel Libeskind)の作品である。ナチス時代のホロコーストを展示している。さらにベルリンのブランデンブルグ門近くには「虐殺された欧州のユダヤ人のための記念碑」(**写真23**)がある。黒色の大小さまざまなコンクリートの塊が並び、まるで墓石のように見える。墓石には名前も何も記されていない。大量虐殺により、名前も、個性も、人間の尊厳も全て奪われた方々の墓石と言えよう。

筆者がベルリン工科大学ヘルマン・リーチェル研究所に客員研究員として滞在していた1970年代に当時の西ドイツのヴィリー・ブラント首相はポーランドを訪れ、

写真 22　ベルリンのユダヤ博物館(リベスキント設計) 所在地：
Lindenstraße 9-14,10969 Berlin

ユダヤ人ゲットー前で跪いて謝罪をしている。当時ブラント首相に対する批判はドイツ国内においてすざましいものがあった。特に東プロシャの地を放棄する事に対し、ベルリンはその地からの引揚者が多かっただけに反対運動があった。しかしブラント首相は東方政策を強行し、結果において近隣諸国と良い関係を保ちそれがドイツにとって繁栄と利益をもたらすことになった(**写真24～26**)。ヒトラーが正式な手段をとって選挙で勝ち政権を取ったのもワイマール共和国時代、憲法そのものは民主的で素晴らしいものであったが、政権は不安定で頻繁に代わった時代であった。政権が代わることで国家が失うものは多い。外交交渉は、妥結まで１年以上かかるのが常である。「相手は約束を履行している」という信頼関係は必要である。ドイツはこういう反省からか、政権を取るのは大変であるが、一旦政権を取ってしまうとやはり国民の代表という事で、そう簡単に政権交代はない。首相の任期は４年である。わが国のマスコミも誰かが政権を取ると次の日から政権批判を始め、権力の座から引きずりおろす事を目的とした記事が増えてくる。ドイツでは、戦前のナチスが国民投票・住民投票といった形で合法的に独裁を行ったことへの反省から、直接民主主義的要素を排除し、間接民主主義による政治を徹底して行っているのが特徴である。また、連邦議会での選挙では、ある一定の得票率(５％)あるいは小選挙区での議席を得られないと連邦議会に議席が持てない仕組みを導入し、ヴァイマル共和国時代に見られた小政党乱立と極右・極左勢力の議席獲得を阻止している。行政府の長であるドイツ連邦首相は、連邦議会議員から選出され、内閣を組織する議院内閣制を採用している。連邦議会の解散につい

写真 24　ブラント元首相旧宅、所在地 :Westend Kaiserdamm 28,Berlin

写真 25　ブラント元首相旧宅記念碑

写真 26　ブラント元首相墓石（Waldfriedhof Zehlendorf, Berlin）

てはドイツ特有の仕組みを採用している。そしてブルーノ・タウトが少年時代から望んでいた恒久平和が訪れることを期待するが、現実は部族間紛争、宗教対立は収まっていない。戦争は二度の世界大戦に代表される総力戦へと発展した。もはや勝敗にかかわらず国家は疲弊し、戦場から離れた銃後にも戦火が及ぶようになり戦争と社会の平和を両立することが困難になった。わが国は領土問題を巡り周辺国と紛争が絶えない。我々日本人からみればドイツの過剰とも思われる戦後の処理、反省に参考とすべき点も多い。

## おわりに

このところ、わが国周辺国から「日本は正しい歴史認識をしていない」との非難を浴びている。本稿では同じ第二次世界大戦で敗戦国となったドイツの戦後処理に触れた。周辺国に迷惑を掛けたという点ではドイツも日本も甲乙付けがたい。しかしドイツは過去を反省し現在は周辺国と大変上手くやっている。

註

1）アナトニア：トルコ語でアナドル（Anadolu），黒海、マルマラ海、エーゲ海、地中海に囲まれた半島で現在のトルコ共和国の国土の97%を占める。主要都市はアンカラ、イズミル、アダナ、コンヤなど。

2）ヘレニズム：アレキサンダー大王の東征（334B.C.）からローマのエジプト征服に至る時代に栄えた文化。アレキサンドリア、アンティオキシアなどの諸都市はヘレニズム文化の都市であった。

3）ペルガモンの大祭壇：ペルガモンは、紀元前３世紀半ばから２世紀にアッタロス朝の都として繁栄したヘレニズム時代の都市である。その外港はエライアとエフェソスであった。ローマが紀元前129年に小アジアの西南部にアシア属州を設けた。そこにあった大祭壇はベルリンに移され、博物館に所蔵された。ペルガモン博物館（Pergamonmuseum）は、ドイツのベルリンにある博物館の１つである。博物館島にあり、館名の由来にもなっている「ペルガモンの大祭壇」を始めとするギリシャ、ローマ、中近東のヘレニズム美術品、イスラム美術品などを展示する。（写真27）

4）ドーリア式：ドリス式とも言う。ギリシャ建築の３種類のオーダーの一つ。最も古いオーダーで、ベースが無く基壇の上に直接柱が建つ。図12の左がドーリア式、右がイオニア式である。さらに頭部をアカンザスの葉で模ったコリント式がある。

写真 27　ペルガモン博物館内ペルガモンの大祭壇

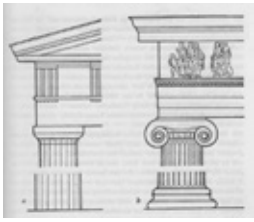

図 12　ドーリア式オーダー（左）とイオニア式オーダー（右）

〈参考文献〉

1．田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト―人とその時代、建築、工芸」 オーム社

2．田中辰明 「ブルーノ・タウト・・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159

3．田中辰明 「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会

4．田中辰明 「バウハウス（ヴァイマール）」月刊建築仕上技術2014年８月号、工文社

5．田中辰明 「バウハウス（デッサウ）」月刊建築仕上技術2014年９月号、工文社

6．田中辰明 「バウハウス（ベルリン）」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社

7．Matthias Donath, Architecture in Berlin 1933-1945, A Guide Through Nazi Berlin Lukas Verlag, 2006